


2 回目の火事がひとつの転機となる

2009年8月、阿部春工場である事件が起きた。工場の横に植えられていた松の木に落雷し、その影響で工場の建物と機械設備を全焼・全損してしまったのである。阿部憲政氏にとって2回目に経験するタオル工場の火事である。

タオル工場は昔から火事がつきものであり、その原因は電気プラグの劣化によるショートや電源プラグとコンセントの間に溜まった綿ぼこりに発火するトラッキングなどが多いが、阿部春工場の出火原因は2回とも落雷であった。阿部春工場のある大西町宮脇周辺は、地元では雷が発生しやすい土地柄として有名である。ほんの小さな火花で工場内に舞っている綿ぼこりに引火し、ガソリンを撒いたかのように瞬時に火は燃え広がる。阿部春工場にとって2回目の火災は大きな被害をもたらしたが、これがひとつの転機となった。

阿部氏は、悲惨な現状を目の当たりにし、このときばかりはタオル工場を閉めようとおもった。しかし、応援してくれる人たちが何人もおり、「中古だが最新式の革新織機を譲ろうか」と打診してくれたメーカーもあった。そのなかのひとつが兵庫県加古川市に本社工場を構える稲岡工業（株）である。同年10月に稲岡工業からの申し出を受け、12月に加古川まで岩間織機製作所製の最新レピア式革新織機6台をうけとりに行き、工場を新しくして翌年の2010年1月には設置を完了させた。そして、同年5月に工場を再開し、2011年6月には田中産業からおなじく岩間織機製作所製の最新のレピア式革新織機2台を購入し、8台体制でバスタオルやフェイスタオル、スポーツタオル、タオルマフラーなどバラエティに富むタオルを生産し、阿部春工場は大火事から数年で復活を遂げた。

「火事が転機」になったのは、織機を最新式に刷新できたことで生産性が数段に上がったからである。また、2006年からスタートしたJAPANブランド育成支援事業による産地ブランドの確立が、量産化体制を整えた阿部春工場の生産量増加と売上向上に繋がった。

阿部春工場の売上について、1980・1990年代は7,000万円～8,000万円前後で推移したが、2000年代に入り輸入タオルの影響が如実に表れ7,000万円を下回るようになった。そこから数年は苦しい状況がつづいたが、2010年代から徐々に回復の兆しをみせた。これを機に2014年5月、資本金800万円で阿部春工場を法人化し、（株）阿部春工場となった。株式会社化にともない、タオルに関わる事業にくわえ、今後さまざまな事業を展開できるように通信販売業務、日用雑貨や事務用品等の製造・販売、農産物や食料品の卸業や輸出入など多岐にわたる事業を登録した。

2016年には売上1億円を超え、大台に乗った。2020年のコロナ禍によって売上は落ちたが、2024年1月に新しく津田駒工業製のエアジェット式革新織機1台を導入し、阿部氏はつぎなるステップへ進もうとしている。

阿部春工場の現在の立ち位置と、「自社ブランド」への挑戦

1968年の創業から数えて約半世紀、阿部春工場は一代目から二代目へ、そして近い将来三代目にその歴史が受け継がれようとしている。その間、時代の変遷とともに阿部春工場のタオルづくりを支えた取引先も変化してきた。原系は、創業から今治糸友会のメンバーであった同心商事（株）から仕入れていた。同心商事は、1947年に大阪に設立された繊維専門商社であり、需要の多い今治に「連絡所」を設けていたが、2007年にユタカ産業（株）へ業務移行している。そのため、阿部春工場ではユタカ産業と取引をはじめ、最近では田窪（株）からも原系を調達している。

タオルづくりで製織と同様に重要なプロセスを担う染色加工では、創業時から産地の昭和産業（株）と中央繊維（株）に依頼していたが、昭和産業は2007年に破産し、中央繊維は現在晒染加工をおこなっていない。2000年代に入って、（株）阿部近染色工場や蒼社染工（株）に依頼するようになったが、阿部近染色工場も現在廃業し

ている。

阿部春工場は、創業からタオルメーカーの下請けや問屋からの受注によってタオルを生産しているため、販売先はおもにタオル専門問屋やタオルメーカーである。産元のタオル専門問屋ではミタカラや田中商店、山内産業（株）、タオルメーカーでは森山タオルと創業時から長い間取引をしていた。1990年代になり首都圏のタオル専門問屋がくわわり、たとえば大阪の鈴木康（株）や名古屋の野村タオル（株）と取引がはじまった。2000年代に入ると今治のタオルメーカーのニューパイル八木忍タオル（株）や清金タオル（株）、タオル専門問屋の（有）佐伯^{さいき}タオルなどとも取引をするようになった。市場ニーズの変化やタオル不況など時代の移り変わりとともに取引先の顔ぶれはすいぶん変わったが、1990年代初頭以前に比べると、より多岐にわたる。

受注の多くは温泉施設のオリジナルタオルやマラソンなどのイベントで販売されるタオル、プロ野球選手の応援タオルなどが中心であり、フェイスタオルもあればスポーツタオルやタオルマフラーもあり、その種類も以前に比べると増加した。

「自社ブランド」への挑戦

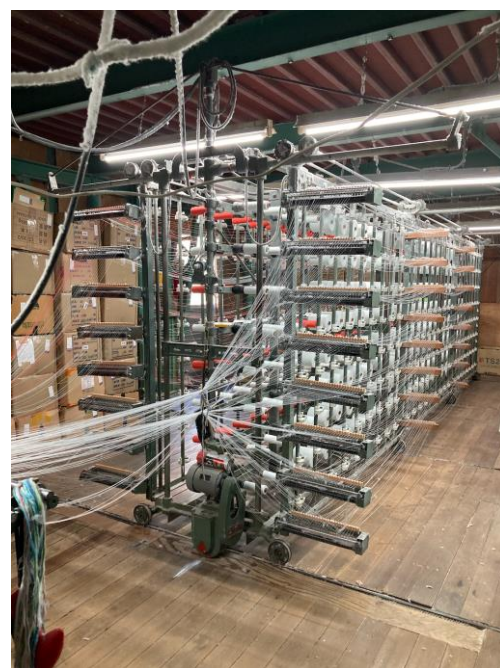
阿部春工場は、現在、従業員5名を抱える小さなタオル工場である。先に述べたように、工場には津田駒工業製のエアジェット式革新織機90インチ1台、岩間織機製作所製のレピア式革新織機95インチ8台の合計9台を設置しており、そのほかに整経機1台、耳巻き機1台がある。

各織機には特徴があり、レピア式革新織機のメリットはミスが少なく、どんな糸でも織れる点にある。一方のエアジェット式革新織機は、なんといっても高い生産性にあり、レピア式の倍以上の生産能力をもつが、ネップ（繊維が絡みあってできた節や結び目）が付いたような特殊な糸でタオルを製織できないというデメリットがあ

る。



津田駒工業製のエアジェット式革新織機とストープリ製のジャカード機



岩間織機製作所製のレピア式革新織機とストープリ製のジャカード機（左）

奥井鉄工所製の整経機（右）



（株）キンダイ製の耳巻き機（左）

綿ぼこり対策のために設置された噴霧器（右）



5人の従業員とは、阿部氏の実弟・哲氏、阿部氏の長男・玲央氏、次男・育生氏と妻・美帆氏（準備工程）、そして長女・真衣氏（経理）のである。

哲氏は、製織の準備作業から耳巻き、営業までなんでもこなす。玲央氏は、大学卒業後、県外の企業でタオルとは関係のない技術職に就いていたが、帰今してタオル製造に関わるようになり、阿部春工場でタオル製造を^{いち}から学んだ。そして、努力して社内検定（織機調整）2級を取得した。育生氏も県外の企業で働いていたが、帰今後、田中産業でタオルづくりを基礎から学び、10年間同社でキャリアを積み、社内検定（織機調整、整経）1級を保有している。阿部春工場への入社は父親である阿部氏の進言であり、現在は阿部氏の右腕として働いている。長男も次男も、阿部春工場に留まらず、今治のタオル産地を牽引していく前途有望な人材であり、将来が楽しみな存在である。

ファミリー・ビジネスとして盤石の体制のもとで、阿部春工場では将来を見据えた、ある試みが2025年1月からスタートした。その試みとは、阿部春工場の歴史において初となる自社ブランドの開

発・製造である。どのような製品を最初に世に出すか、どのようなデザインや色を採用するか、どのように売っていくかなど、自社ブランドへの挑戦は難しい選択の連続であるが、阿部春工場には強力な助っ人がいる。先に触れた、西条市に本社を置く佐伯タオルである。流通のノウハウをもつ同社とタッグを組み、サウナ帽子をオリジナルのブランドとして販売する予定である。



試作品の「サウナ帽子」（左）は残糸を使ったもの



試作品をへてシンプルにデザインされた「サウナ帽子」（右）

阿部春工場は、創業からおよそ60年もの間、下請けに徹してタオルを生産しつづけてきた。自社ブランド製品の生産は、阿部春工場の歴史に残る大きな一歩となる。この新たな一歩を踏み間違えないように、家族一丸となって準備している。

（次号につづく）

